

JIA 建築家大会 2014 岡山

境界を越えて — 総合化に挑む建築家の使命 —

2014年9月25日(木)、26日(金)、27日(土)

大会を終えて



大会委員長 錦織亮雄

「JIA 建築家大会 2014 岡山」は中国支部が16年ぶりに開催した2度目の大会でした。16年前は広島でしたが、今回は岡山で開催しました。

JIA 建築家大会は最近どんどん内容が多様になって、プログラムは盛り沢山ですから会場の準備が大変です。この多様な内容を街の中にばらまけば岡山が賑やかになり参加者も楽しめるかも知れないと、勝手な理論武装をして準備を始めました。

岡山で開催するなら倉敷も入れたい、倉敷なら大原美術館でパーティーをやりたい、丹下健三さん設計の旧倉敷市庁舎だった倉敷市立美術館もある、浦辺鎮太郎さん設計の倉敷国際ホテルもある、岡山市には最近出来た岡山コンベンションセンター(ままかりフォーラム)もある、芦原会長の父君芦原義信さんの設計になる岡山シンフォニーホールも使いたい、前川國男さんの設計になる岡山県天神山文化プラザも使いたい、岡田新一さん設計の岡山県立美術館もある、日銀を再生したルネスホールもある、そしてレセプションはホテルで、ということで、結局これら全部9箇所の会場を使って大会を開催しました。

街中に広がる会場構成は、参加するほうも開催するほうも何かと不便で手数や足数がかかりましたが、何しろ大会のテーマが「境界を越えて — 総合化に挑む建築家の使命—」ですから、ご参加いただいた皆様は、多少の不便は克服して分散する会場とそれを結ぶ路面電車、それにそれぞれで独自に発掘された私的な会場を加えて岡山の全体像を捉え楽しんでいただいたことと手前勝手に推察いたします。

建築家大会は多様なプログラムから参加者の次なる行動への動機が生まれれば成功だと思いますが、今回のテーマ「境界を越えて — 総合化に挑む建築家の使命—」の趣旨や、オギュスタン・ベルクさんの提起された無場所性や無基底主義による人間存在の危機、コスモス・真、善、美・技術と象徴の不可分性などいわば原点回帰の提唱は今の時代への根源的な問いかけでした。参加された皆さんの新しい動機を生むことを期待するものです。

パリに帰着したことを知らせるベルクさんのメールには、「JIA 大会に参加した若い建築家が“Junkspace”にあこがれず、連歌の国日本にふさわしい建築を創造されるように祈ります。宜しくお願いたします」というメッセージが添えられていました。

最後に、遠方からご参加いただいた来賓各位と会員の皆様、長期にわたって準備にご尽力いただいた実行委員の皆様にご心から感謝申し上げます。



実行委員長 山田 暁

「JIA 建築家大会 2014 岡山」に全国各地から多数の皆様にご参加いただき、厚く御礼を申し上げます。

1998年に「ひろしまで未来を視る」をテーマに、さすがは広島、との評価をいただいてから16年ぶりの中国支部での開催です。今回は会場を岡山市内各地に分散して— 多少ご不便をかけることになったでしょうが—、町に出ていく、町のそれぞれで建築家が集まって催しが行われている……、つまり町に溶け込むかたちの分散型大会として考えてみました。また、大会式典前日には市域を越えて、岡山の隣接都市倉敷でのオープニングセミナー、町歩き、ウェルカムパーティー等を行いました。「境界を越えて」のテーマのもと、市民と共に歩む公益社団法人としての意味合いが実現できたと自負しています。

式典当日には、他にも多くの分科会、シンポジウム、セミナーが開催されました。特に「おかやま5会+1まちづくり協議会」「JIA 災害対策委員会」「JIA 東北支部」の共催によるシンポジウム「中国地方の自然災害の特性(その歴史性と予測)」が開かれましたが、昨今、全国各地において大きな災害に見舞われる事態が頻繁に起こっている中、時を得た催しとなりました。災害後の対応に多くの問題が起こっていて、東日本の震災後の復旧も道半ばの状況があります。これらの問題を一般市民と共に考える貴重な機会となりました。

また式典後の基調講演として、フランスからオギュスタン・ベルクさんをお迎えして「建築の再コスモス化は可能か」との演題でお話をいただきました。かの国でパイロットのストがあり、来日にハラハラしたのを思い出します。

大会3日目には若手、ベテランの建築家3人による連続セミナーが、多くの建築を志す若者の参加を得て開催できました。大会を通じての行政および建築系大学、専門学校、および建築設計他団体のご支援、ご協力に感謝いたします。

最後に参加いただいた会員の皆様、準会員の皆様、法人協会会員の皆様、お陰さまでほのぼのとした大会にすることができました。ありがとうございました。

次回は金沢でお会いしましょう。



デニム生地が使われたコングレスバッグと、レセプションパーティーのお土産・備前焼のぐいのみ

大会式典・表彰式・基調講演

9月26日(金) 14:00～17:00 岡山シンフォニーホール 大ホール

中国支部では1998年、広島にて「ひろしまで未来を視る」というテーマで大会を開催してから16年ぶりとなる。

前大会では、都市の復興や持続性社会と平和などの内容で「広島宣言」を採択した。

今大会では、建築家から今日の問題提起の意味を込め「境界を越えて」というテーマで、これからの総合化に挑む可能性を考え合わせる大会を目指し、さまざまな事業を行った。

全国からたくさんのJIA会員の皆様に、大変お忙しい中ご参加いただきましたこと、心からお礼申し上げます。

■大会式典

大会のメインである大会式典は9月26日、岡山シンフォニーホールにて行われた。

はじめに開催地中国支部を代表して、錦織亮雄大会委員長が「今大会のテーマ「境界を越えて — 総合化に挑む建築家の使命 —」のもとに、この多様な風景と歴史に彩られた岡山で、未来への知恵を語り合しましょう」と歓迎の挨拶を行った。

続いて、芦原太郎JIA会長が挨拶。JIAの役割として、市民・行政・専門家の境界を無くすのではなく、いかに越えてゆくかをそれぞれの地域で工夫しながら、より良い建築・まちづくりを推進していくこと。これからの建築家は、建築空間の境界を越えて、建築家職能の境界を越えて活躍していくことを確認できれば、この大会の大きな成果になるとの認識の共有を求めた。

その後、来賓の挨拶として国土交通省住宅局大臣官房審議官、杉藤崇氏よりご挨拶をいただいた。

AIA、ASA、KIRA、KIAの代表団、国内関係団体等の来賓紹介を経て、海外来賓を代表して、AIAアメリカ建築家協会のヘイリン・ドレイリング氏からお言葉を頂戴した。

式典最後に、芦原JIA会長より、キム・ヨンス氏(KIRA)、ヘイリン・ドレイリング氏(AIA)、坂茂氏(欠席)への名誉会員授与式が行われた。



大会委員長挨拶



錦織亮雄氏(大会委員長)



杉藤崇氏(国土交通省住宅局大臣官房審議官)



ヘイリン・ドレイリング氏(AIA会長)



JIA名誉会員授与式



芦原太郎氏(JIA会長)



内藤廣氏(建築大賞 審査委員長)



建築大賞 表彰



建築大賞 受賞者

■JIA 中国建築大賞表彰式 [審査委員長 内藤 廣氏]

JIA中国支部では、JIAの建築家憲章の理念に基づき、中国地方の優れた建築デザイン・建築文化・環境形成に寄与した建築作品を設計した建築家を顕彰する目的で、2009年に「JIA中国建築大賞」を創設している。

本年が第6回目となり、大会式典で下記の入賞作品を発表し、表彰を行った。

第6回 JIA 中国建築大賞 2014 受賞者作品リスト

【一般建築部門】

受賞	作品名	設計者名
大賞	出雲市庁舎	江角彰宣(みずほ設計) 川島克也(日建設) 田中公康(日建設)
		特別賞
優秀賞	岡山県立大学同窓会館	岩本弘光(岡山県立大学)
	山陽合同銀行旧北支店 再活用改修工事 「ごうぎんカラコロ美術館」	小草伸春(小草建築設計事務所)
	Seto	原田真宏 (MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO) 原田麻魚 (MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO)
	おかやま山陽高校 90周年記念同窓会館	大角雄三(大角雄三設計室)
	二つのクリニック (江本智子ウィメンズクリ ニック・江本内科)	永見龍一(永見龍一建築計画事務所)
	KDC(小さな森の歯科診療所)	加藤詞史(加藤建築設計事務所)

【住宅部門】

受賞	作品名	設計者名
大賞	木立ちの家	後藤亜貴(後藤亜貴建築設計事務所)
特別賞	後山山荘	前田圭介(UID)
優秀賞	Indoor terrace の家	原 浩二(原浩二建築設計事務所)
	寄島の家	今川忠男(今川建築設計)
	早島の家	稲垣年彦(トリムデザイン) 大賀環子(トリムデザイン)

■基調講演 [オギュスタン・ベルク氏]

「建築の再コスモス化は可能か」と題し、フランスよりオギュスタン・ベルク氏を迎え、講演していただいた。

基調講演概要は「人間の価値とコスモス性」「都市・国家計画及び建築の再コスモス化」。コスモスとは「善」「美」「真実」を絶え間なく結びつける包括的な秩序であり、建築の再コスモス化とは、コスモス性を具体的に風土に結びつけるもの。すべて地上から立ち上るのである——これからの我々の建築に対する姿勢について考えさせられる内容の講演だった。この講演の詳細は、今後の『JIA MAGAZINE』で掲載予定である。



オギュスタン・ベルク氏(基調講演)



藤田佳篤(中国支部/ケイ・エフ設計)

講演 「倉敷の特徴ある近代建築の創出—実業家大原孫三郎と建築家薬師寺主計の存在—」

9月25日(休) 13:30~14:50 倉敷市立美術館(旧倉敷市庁舎)



上田恭嗣

(岡山地域会/ノートルダム清心女子大学教授)

倉敷の近代における建物づくり・まちづくりは、類例のない素晴らしい手法でなされている。それは、まず倉敷の実業家大原孫三郎(1880-1943)の住むまちを美しく創る信念である。大原家が事業展開で生み出した多大な利益を、地域のまちづくり・建物づくりに活用する考えがあった。そして、その建物づくり・まちづくりを一人の建築家薬師寺主計(1884-1965・岡山県総社生まれ・東京帝国大学工科大学建築学科卒)に全幅の信頼を持って託し、そのほとんどの建造物を一人の施工者藤木正一(1891-1967・藤木工務店創設者)に任せたことである。

さらに倉敷のまちづくりは、近現代につながり戦後の子息大原總一郎(1909-1968)、そして現代の大原謙一郎氏(1940・大原美術館理事長)へと倉敷の文化のまちづくりが継続・展開されている。

講演では、薬師寺主計が設計した倉敷を代表する有隣荘と大原美術館の誕生史等について紹介した。薬師寺は、大学卒業後、佐野利器の勧めによって異色の陸軍省に入省した。陸軍省では建築技師として最高の地位に昇り、陸軍省で初めて天皇の技師の称号を与えられた人物である。1922年、渡欧時に日本人建築家として初めてル・コルビュジェと面談し、彼の国際建築様式につながる考えを聞きとり、図面も入手して帰国した。そして、建築雑誌で日本の建築界に最初にル・コルビュジェを紹介した人物である。

大原美術館の前にある有隣荘(1928年)は、天皇家・宮家等の貴賓を招く邸宅として急遽、設計変更され、和風部分は東京帝大教授伊東忠太の設計指導を受けている。洋風部分は薬師寺が用いた早期のアール・デコ様式で表現された。しかし、屋根瓦の色や食堂のインテリア等は、大原美術館の西洋絵画を大原孫三郎の許諾のもとで収集した画家児島虎次郎(1881-1929)によって中国風に覆っている。珍しい和洋中折衷様式の建物であることを紹介した。



有隣荘大原孫三郎別邸



大原美術館と今橋

大原美術館(1930年)は、薬師寺の進言によって急遽、現在の位置に昭和5年3月に建設が決定され、この年の10月に完成した。これは、陸軍特別大



大原美術館の石塀

演習が岡山の地で開催される情報を薬師寺がいち早く入手し、現敷地での建設を大原孫三郎の許諾のもと決定し執り進めたからである。当初、大原美術館は赤いスパニッシュ瓦で葺かれる計画であったが、建設途中に急遽、現在の形状に変更となった経緯がある。また、外部の石塀は「あるものを使う」「風景を継承する」思想でもあり、大原孫三郎の干支でもある龍の体を表現していると述べた。ちなみに大原美術館の前にある倉敷川に架かる今橋(大原孫三郎が、大正皇太子来倉の折、建設。設計薬師寺主計・意匠児島虎次郎)には、水の神でもある龍の絵柄が欄干に彫られている。一連のコンセプトで風景も創られていることを紹介した。

戦後は、薬師寺の部下であった浦辺鎮太郎(1909-1991)が教えに従い、大原總一郎のもとで倉敷のまちづくりを展開した。

展示

9月23日(火)~28日(日) 岡山県天神山文化プラザ 第2、第3、第4展示室

前川國男設計の岡山県天神山文化プラザを会場に9月23日から28日までの期間で行いました。全国で受賞された作品の展示から地元中国地方での作品まで多彩な展示でしたが、JIA会員はもちろん、学生や建築に興味のある方々などJIA会員以外の多くの方にも来場していただきました。中には会場である前川作品の見学と合わせて来場された方もおられ、JIAの活動を紹介するうえで有意義な展示会でした。

【展示内容】

- ・日本建築大賞
- ・日本建築家協会賞
- ・JIA 新人賞
- ・JIA25年賞
- ・環境建築賞
- ・JIA 全国学生卒業設計コンクール
- ・第8回建築家のあかりコンペ
- ・アーカイヴス委員会
- ・JIA 中国建築大賞
- ・ひろしまの街づくり(JIA 中国支部広島地域会)
- ・JIA 中国支部会員作品



展示会場 天神山文化プラザ



展示会場内



武村耕輔(岡山地域会/武村耕輔設計事務所(KTAA))

見学会 「倉敷の町並み紹介、町歩き」

9月25日(木) 15:00～17:00 倉敷市立美術館(旧倉敷市庁舎)→倉敷美観地区周辺



榎村 徹

(岡山地域会/榎村徹設計室)

今回の岡山大会の第1日目は、イベントとして倉敷で開催されました。その中でご希望もあり、倉敷の町並みを歩いて見学してもらうという行事も催され、倉敷に関わり続けて30余年の私にその役を任せられました。ただ、参加人数も確定せず、時間も90分という状況で、おそらく100名程度になるのではないかという想定でしたので、参加者全員を先導して案内することは不可能であり、数人の地元の建築家にも同行してもらうことにしました。

まず講演会場で簡単なスライドでまちの状況を説明し、歩くコースの案内地図を配布し、途中離脱も自由ということでスタートしました。通常の見学ならば15名程度で、建築の内部までの案内も可能ですが、通りを歩きながら外からの概要説明となり、満足いただけたかどうかは心配です。



美術館内での説明

見学のポイントは、皆さんがよくご存知のメインの倉敷川河畔ではなく、今話題の旧街道を中心に歩きました。昔の生活の中心となっていた生活観を残す通りです。私が30余年にわたり関わってきた通りであり、現在は中心市街地活性化計画のもと、活性化と修景が進んでいる新しいスポットです。その最終ポイントの「楠戸家・はしまや」というワルター・グロピウスやサルトルなども訪れた、倉敷を代表する老舗呉服屋の商家は、私が20年にわたり継続的再生を行っているところであり、数棟の再生物件を内部まで見学

町並み見学コース

市立美術館→国際ホテル→奈良萬・白井→林源一郎商店→中銀→井上家→吉井・恒美→御坂の家→楠戸家・はしまや→想創舎

してもらいました。旧街道の東に当たるこの本町・東町通りは、以前は寂れたまちでしたが、今は観光客の好みも変わり、「歩いて楽しむ、生活観の味わえるまち」ということで人気のスポットとなっています。倉敷の新しい価値として味わっていただけたらと思いました。ただ、人数の多さによる混乱の中での案内でしたので、申し訳なかったと反省しています。ぜひ、再度ごゆっくり倉敷を訪れ、味わってみてください。



倉敷まち歩き

倉敷のまちは江戸期から物資の集散地として栄え、幕府の直轄地の「天領」であり、明治以降は倉敷紡績(クラボウ)の繊維産業を中心に栄え、その後クラレへと続きます。そのオーナーであった大原家の社会・文化資産が継承されているまちです。今もその精神は官公庁そして民間へと受け継がれています。「古いものを大切に、新しい良質のものを付加していく」ことで生きた魅力あるまちとして、今に続いています。その地で建築やまちに携われる者として、恵まれた環境を活かし、これからの時代の日本のトップランナーを目指して日々研鑽をしています。

倉敷のまちは江戸期から物資の集散地として栄え、幕府の直轄地の「天領」であり、明治以降は倉敷紡績(クラボウ)の繊維産業を中心に栄え、その後クラレへと続きます。そのオーナーであった大原家の社会・文化資産が継承されているまちです。今もその精神は官公庁そして民間へと受け継がれています。「古いものを大切に、新しい良質のものを付加していく」ことで生きた魅力あるまちとして、今に続いています。その地で建築やまちに携われる者として、恵まれた環境を活かし、これからの時代の日本のトップランナーを目指して日々研鑽をしています。

展示 「ひろしまの街づくり「ひろしましみんひろば」の提案」

◆広島地域会◆ 9月23日(火)～28日(日) 岡山県天神山文化プラザ 第2展示室

世界遺産原爆ドームを擁する広島平和記念公園から基町高層住宅・広島城に至る一帯は、隣接する元安川と合わせて約200haの広がりをもつ広島市の都心のコア空間である。

1960年に丹下健三先生がCIAM(近代建築国際会議)において発表された広島平和公園計画とほぼ同じエリアである。被爆当時、草木も生えないと言われた70年目を迎える現在にあつて、私たち中国支部広島地域会まちづくり委員会では、日ごろの建築活動を通じてまちづくりに参画しているという立場から、被爆100年を目標としたこの地区のあるべき姿「ひろしましみんひろば」をまとめ、岡山全国大会街づくり提案プラザ会場において制作モデルとビデオによるプレゼンテーションを行った。

提案は、丹下案の復興から国際平和を希求する点を良しとし、ここまでの被爆後の着の身着のままの中での復興過程を受け、これからのまちづくり主体としての町衆によるビジョン型のまちづくり提案の中間報告である。

ここでは、地区のDNAを整理・把握するとともに現況のかかえる問題点を抽出し、それらを解決していく7つの提案を持つランドデザインとしてまとめ、その中で再整備の決定が急がれる広島市民球場跡地のあるべき姿を提案した。当たり前の市民生活が継続す

る中で、そこで培われるホスピタリティの醸成により国際平和を希求するという視点から「ひろしましみんひろば」に至ったとした。

どの程度、展示した制作モデルとビデオを

閲覧いただけたのか把握できていないが、多くの会員および一般の方々にご覧いただいたことは、モデルに貼られた感想記述ポストイットカードにより推測される。今後は、これらのご意見を考察するとともに、社会に向けて発信を続けていきたいと考えている。

都市計画家石川栄耀氏が『私達の都市計画の話』(1948年)の中でこう言っている。

「社会にたいする愛——これを都市計画といふ」と。



前岡智之(広島地域会 中国セントラルコンサルタント)

連続セミナー

9月27日(土) 10:00~16:40 岡山県立美術館ホール

前田圭介氏、出江寛氏、坂茂氏の3名の建築家による連続セミナーを行いました。地方から世界、若手からベテランと幅広い建築家の立場から、社会に開かれた大会の一環として、会員のみならず一般の方々へも開かれたセミナーが、各1時間40分で計3回行われました。200名収容の会場は終日満員になり、3名の方々への関心ぶりがうかがわれました。



■前田圭介氏 「地方都市から世界へ」

3回のセミナーのトップを切ったのは、私たち中国支部の仲間でもある前田圭介氏です。広島県福山市という地方都市を舞台に活躍する新進気鋭の若手建築家です。建築周囲の環境を取り込みながら、同時に内部に新たな環境をつくり出していく手法と、さまざまな困難な状況をたゆまぬ努力で乗り越えていき、また現場経験を活かした胆力は、地方都市で存分に発揮されています。これまでの代表的な作品群の紹介からは前田圭介氏のもっている規定されてない空間領域を見てとることができました。

内部外部に自然環境が折り合い、風が目にみえるような作品に、「地方都市から世界へ」のタイトル通りに地方都市の建築家に勇気を与え、また一般の方々にも建築の大きな可能性を感じていただける内容でした。

■出江 寛氏 「建築とは哲学することである」

まさに1時間40分間、出江ワールドが展開され、あつという間の時間であり、まだ聞き足りないといった感もある、大変興味深いセミナーでした。さまざまな画像による日本文化の解説は、建築家というものは多くの知識を持たなければ文化の担い手になれない



し、また清廉潔白だけでも建築文化になっていかない。建築家には「いき」や「つや」が必要で、それがさまざまな建築となり文化へと定着していく建築の奥深さに驚嘆し、美しい日本文化を建築を通して継承していく意味を実感しました。プロジェクトによって使っていく素材を考え、文化としての厚みのある建築を創造していかないといけない建築家という仕事はまさに「建築とは哲学することである」のタイトル通りのものでした。この講演の内容は建築家である以上絶対に聞いておかないといけないと感じるものでした。

■坂 茂氏 「作品づくりと社会貢献の両立を目指して」

連続セミナーの3回目は、プリツカー賞を受賞され、まさに世界を舞台に活躍する建築家、坂茂氏の講演でした。世界的視野に立ち、また弱者への温かい心から織りなされる建築には、日本人の心が感じられ、まだ世界各地で今も行われている紛争や自然災害の犠牲になっている人々に建築で力になっていこうという、まさに凄まじい胆力には息をのむものがありました。世界各地で行われる設計コンペでの審査員の心を引く手法も紹介され、建築家にとってはひとつのヒントをいただいた感もありました。ユーモア溢れるわかりやすい話と、美しい画像による講演に、建築に縁遠い一般の方々にも建築のもっている可能性や力、そして日本の建築家が世界で活躍し、また多くの人々へ貢献している様子を伝えることができました。

5時間にもわたる連続セミナーを終えて、建築には無限の可能性があり、まだまだ我々にはやらなければならないことが多くあると実感しました。また多くの一般の方々に来場をいただき、開かれたセミナーになり、建築文化を多くの方々と共に考えていく機会になる充実した内容となりました。

佐々木 満(岡山地域会/グランツ設計一級建築士事務所)



公開審査 「第8回 建築家のあかりコンペ2014」

9月27日(土) 13:30~16:30 ルネスホール金庫棟(旧日銀岡山支店)

今年で8回目になる「建築家のあかりコンペ」の公開審査は、妹島和世氏を審査委員長に迎えてルネスホール金庫棟(旧日銀岡山支店)にて行いました。一次審査通過者7名による作品は、募集テーマである「身体にちかいあかり」に対してさまざまな切り口から展開されたものでした。苦労して作成された試作品や画像を使いながらの巧みなプレゼンテーションに対して、審査員の方々からは、照

明の構造から製品化へ向けての課題、時には販売戦略に対しての意見など鋭い質疑がされました。自分の語り口で質疑に回答していく発表者と審査員とのやり取りは、穏やかでありながらも見ごたえのある時間でした。改めてコンペの醍醐味を感じることでできた公開審査でした。

武村耕輔(岡山地域会/武村耕輔設計事務所(KTAA))

●審査結果

最優秀賞 萬代基介(萬代基介建築設計事務所・東京都)
「光る空気のかたまり」

優秀賞 大成優子(大成優子建築設計事務所・東京都)
「ひかりを生ける」

特別審査員賞 山梨知彦(日建設計・東京都)
共同提案者:角田大輔・酒井康史
「すきんとぼーん」

DAIKO賞 大関美奈子(兵庫県) 共同提案者:水本 梓
「重ねる一身体に近づくあかりのかたち」

佳作 バンバタカユキ(takayuki.bamba + associates・京都府)
共同提案者:福島佳浩
「光のドロイング」

大林 元(ゲン・コーポレーション・大阪府)
「yolk」

小野 優(西日本工業大学建築学科・福岡県)
「Egg & Light Stand」



あかりコンペ 公開審査



あかりコンペ 受賞者と審査員

セミナー 「一般実務者のための伝統的構法木造建築物の設計法」

◆山口地域会◆ 9月26日(金) 9:30~12:00 岡山コンベンションセンター 展示ホール

日本の石場建てを含む伝統的構法には、長年継承されてきた技法や技術があり、また大きな変形に耐える構造的な特徴を持っている。平成22年に国土交通省の要請を受けて、石場建てを含む伝統的構法の設計法を構築する目的で「伝統的構法の設計法作成及び性能検証実験」の検討委員会が、鈴木祥之氏を委員長として設置された。3年間にわたり、実大振動台実験や構造要素実験など数多くの検証実験、多種の地震応答解析を実施し、このたび、設計法案としてとりまとめられた。伝統的構法の良さを生かした実務者が使いやすい設計法について、4人の検討委員の方を講師として迎え、設計法の研修を行った。

■西澤政男氏(日本伝統建築技術保存会会長/西澤工務店代表取締役)

「棟梁から見た伝統的構法の良さ」

日本の伝統的構法には、規矩術や木割法等先達の叡智といえる技術があり、日本人の感性と美意識に適合した造形をしており、先人の残してくれた遺産といえる。「反り」「増し」「振れ隅」「枯木」等の美を造る技術があり、「継手」「仕口」等の工作法は江戸時代の古文書にも残っているものと同等な方法である。



■鈴木祥之氏(立命館大学衣笠総合研究機構教授/京都大学名誉教授)

「伝統的構法木造建築物のこれからの設計法」

検討委員会における取り組みや検討内容について説明された。伝統的構法は、柱脚の移動を拘束せず、水平構面も剛床でなく、高い変形性を持って水平力に抵抗する構造的特徴を持っている。これからの設計法として、比較的簡易な計算による「標準設計法」、限界耐力計算と同等の計算



を用いる「詳細設計法」、あらゆる建築物に適用できる時刻歴応答解析を用いた「汎用設計法」の3種類の設計法を提案した。

■齋藤幸雄氏(検討委員会設計法部会主査/齋藤建築構造研究室主宰)

「実務者が使いやすい伝統的構法設計法」

3種類の設計法には、対象建築物や計算方法の違いがあり、さまざまな建築物に対応できるものとしている。住宅を対象とする標準設計法には、柱脚の水平方向や鉛直方向の拘束状態の違いによる3種類の柱脚仕様規定がある。石場建ての柱脚の滑り量は20cm以下であること、石場建てでは柱脚が移動することで上部構造への過大な入力力が抑制されることなどが実大振動台実験で判明した。



■和田洋子氏(検討委員会事務局/岡山地域会/パジャン取締役)

「伝統的構法の設計事例紹介」

自らが手掛けた石場建て木造住宅が出来上がるまでの工程を映像により紹介した。木材の加工段階から、足固め後の石場建て独特の礎石上への建方方法、金物を使用しない大工の技による組み立てや納め手法、精巧な造作技術、土塗り小舞壁の左官工事など伝統的構法の特徴である南面開放住宅が完成するまでを説明した。



今後、この設計法が法制化されることを期待すると共に、多くの実務者が伝統的構法の良さを再認識し、積極的に取り組み、伝統的構法が未来に引き継がれていくことを願っています。

田中輝幸(山口地域会/巽設計コンサルタント)



セミナー 「里山資本主義の実現に向けて(バイオマスタウン真庭の取り組みと木造建築のすすめ)」

◆鳥取・島根地域会◆9月26日(金) 9:30~11:30 岡山コンベンションセンター 301会議室

都心部に資本が集中している現代の日本ですが、里山がもともと持っていた価値をあらためて見出し、それを資本に独立した経済活動を行っているのが、岡山県真庭市です。

その中核をなしている銘建工業株式会社の代表取締役中島浩一郎氏をお招きして行われた講演では、木質バイオマスエネルギーを用いて真庭市ではどのような取り組みが行われているか説明していただきました。木材の廃材を利用して行われるこのバイオマスエネルギーは、国土の多くが森林である日本で興味深い内容でした。

燃料エネルギーの大部分を輸入に頼っている日本では、円安によるコスト増が無視できない状況にあり、それに代わる重要なものとして注目されています。

このエネルギーを比較してみると、灯油36円に対して、ペレット(木くずを成型圧縮したもの)が18円程度となり、単純におよそ半分のコストとすることができます。あわせて、廃材を使った発電も



行い、余剰分は電力会社に売電をしています。

翌27日に行われた「バイオマスタウン真庭」では、特産のヒノキを中心とする真庭市のさまざまな取り組みが見られました。銘建工業株式会社では、ペレット





真庭産ヒノキを使った真庭市役所本庁舎エントランスの見学風景

ト製造機や端材やかんなくずを使う発電機を見学しました。特別に大断面工場を見せてもらい、開発中のCLT集成材について話を聞くこともできました。

真庭市役所本庁舎は、真庭産の木材を家具内外装材などふんだん

に活用し、周辺の歩道も木片コンクリートで舗装しています。さらにバイオマスボイラーを導入し、3フロア分の空調をまかなっています。市の取り組みとして、古い町並みや小学校旧校舎の保存などを行っており、地元の文化を守る体制が整っています。バイオマスツアーはそのための大きな役割を担っているのではないのでしょうか。

日本では、欧州と比べて広大な森林を保持しているにもかかわらず、それを有効活用できていない状況にあります。もっと身近にあるものに目を向けて、都心部にはない、里山であるがゆえの資本について理解していくことが必要だと感じました。



原 浩二(島根地域会/原浩二建築設計事務所)

※バイオマスツアー：真庭市は観光への波及、バイオマスによる地域づくりの発信のため、2006年から「バイオマスツアー真庭」を開始しました。2009年からは一般社団法人真庭観光連盟が運営母体となり、関連企業などと連携してバイオマスタウン真庭を巡るツアーを実施しています。

シンポジウム 「中国地方の自然災害の特性(その歴史性と予測)／東日本復興報告」

9月26日(金) 10:00～12:00 岡山コンベンションセンター 共催：おかやま建築5会+1まちづくり協議会/災害対策委員会/東北支部

パネラー 岡山市役所危機管理室室長 山地由記
 おかやま建築5会+1まちづくり協議会 藤井義和
 AMDA(認定特定非営利活動法人アムダ) 谷 佳世
 JIA災害対策委員会副委員長 大友 彰
 JIA東北支部宮城地域会復興支援委員長 手島浩之
 JIA災害対策委員会委員長(コーディネーター) 岡部則之

■趣旨

自然災害は、地域性によらない物理的普遍性と、地域や歴史に依存する特殊性を併せ持ち、あらゆる災害とその被害は個性的で、常に独自性を帯びている。長い歴史を持つ地域は、過去の災害による被害実態も多様に記憶されており、その地の災害史から学べることは、今後の災害対策に必須なことを考えます。

災害が少ないと思われていた中国地方(広島市)において、8月に想定を超える甚大な被害に見舞われました。災害によって失われた日常生活を速やかに取り戻すためには、身体的、経済的な問題をはじめ、さまざまな問題に直面します。シンポジウムでは、「想定外」という言葉が多用される中で、今まで想定していた災害対策についてどのように考えていくか、いま一度見直す場となるように望みます。また、市民・行政・専門家が災害に対して事前の段階から緊急支援、復興に至るまで連携して活動のできる社会を目指すことを願います。

■討議内容

基調講演として、山地氏から岡山市の各種災害ハザードマップをもとに、市民へ防災啓発活動を働きかけ、日常生活に意識的かつ組織的に地域防災の気運の向上に努めているとの紹介がありました。また、災害対策の補助制度や自治組織づくりを報告されました。

地元岡山の建築の専門家の集まりによる過去3年間の防災啓発活動を紹介した藤井氏は、岡山県の自然災害は少ないが、近年の研究結果として断層型地震の可能性が新たに見つかったことや、安政南海地震の被害状況が江戸期の記録に克明に記載されているなど、地域



の歴史に学ぶことも今後の災害対策を考える上で重要であるとの報告をされました。

今現在も続けている東日本大震災の被災地におけるAMDAの最前線の医療支援活動状況について谷氏から紹介があり、災害の種別により必要な医療科目が異なることや、被災された方の目線を見極め、患者に寄り添い活動をつづけること、「援助を受ける側にもプライドがある」「相互扶助」の意識をもつこと、「備えあれば憂いなし」ということ、異分野の専門家同士の連携を模索し日常から備えておくことが重要であると報告されました。

東日本大震災の発生直後から身の回りで起こっている状況を自身の体験を通して紹介した大友氏は、建築家として、応急危険度判定などの活動に携わる傍ら、被災地で見聞きした生活状況について報告をされました。最も重要なことは、時間軸を明確にした復興のあり方を模索することであると述べられました。

地域のまちづくり委員会と共に復興住宅に取り組んでいる手島氏は、自力再建住宅と災害公営住宅を共存させることの困難さを紹介されました。特に災害公営住宅での高齢者の見まもりや継続性をどう担保し、維持管理してゆくか、多くの課題を解決しないと将来居住空間が破綻することに繋がる懸念が大きいと報告されました。

急遽JIA東北支部福島地域会長阿部直人氏から福島の復興について報告をしていただきました。福島の場合、ふるさとの喪失感から精神を病んでいる被災者が多く、復興の見通しが見えない現実や自治体の政策とのギャップが大きいことを報告されました。根本を問われている現実をどうのり越えるか。さまざまな関係性を問い直し将来のビジョンを共有するために、困難を乗り越えて異分野の専門家と協働することが重要であると指摘されました。

大石雅弘(岡山地域会/ADO建築設計事務所)



※おかやま建築5会+1まちづくり協議会：(一社)岡山県建築士会/(一社)岡山県建築士事務所協会/(一社)日本建築学会中国支部岡山支所/(公社)日本建築家協会中国支部岡山地域会/岡山建築設計クラブ/NPO法人まちづくり推進機構岡山